

千葉商工会議所 会報

夢シティちば

2022

3

Vol.709

令和4年3月1日発行
(毎月1日発行)

80th
ANNIVERSARY
千葉商工会議所

千葉商工会議所 80周年 記念特別号



▲本社外観

(DATA)

モデン工業株式会社

代表取締役 関 泰之

本社 千葉市中央区松波 3-11-19
☎043-255-1911

▲会議室



▲オフィスの様子

▲本社エントランス



▲行先表示札取付作業



▲現場での社員研修（OJT）の様子

時代のニーズに応え外線工事から内線工事へ

茂原で電気設備会社として
地域の電線工事を担い成長

創業は1960年。私が4代目の社長です。私の父が茂原市で創業し、茂原電設工業を縮めて「モデン工業」となりました。周辺に南関東天然ガス田があり、ガス会社や、ヨードを含むかん水採取する工場の電気設備工事を受注していたと聞いています。

当時は高度経済成長期で、インフラ投資が伸びていた時代。電柱を立てて電線を張る外線工事を茂原周辺地域で受注し、ニーズは途絶えず、忙しかったようです。オイルショック後、急に需要が落ち込み、県の入札に参加して建物内の電気設備を施工する内線工事に進出。商圏を県北西部へ拡大しようと、現在本社がある中央区松波へ移転した頃から、大手ゼネコンを通じて大きな案件も増えていきました。

はじめはゼネコンの下で電気設備工事を請け負うサブコンで、さらにその下に協力会社がありました。昔は施工を請け負う職人さんも抱えていましたが、今、社員は主に現場監督を務め、施工管理がメインとなっています。

家業に入社するも、4年後に
ドイツへ渡りコンピューターの道へ

私は長男ですが、子どもの頃、父の後継にと考えたことはありません。従業員はたくさんいたし、父からも何も言われませんでした。私は、大学時代にアルバイトでコンピューターのプログラマーをしていて、就職もソフトウェア関連を目指し、引き合いもありました。しかし、父の勧めで大学卒業後、とりあえず当社に入社したんです。でも給料は学生時代のアルバイトの方がよかったですし、当時の最先端の業界で業務系ソフトを作ることが純粋に面白かったんです。結局、当社を4年で退職し、ドイツのコンピューター関連会社の日本人へ。海外で作った業務ソフトを日本へ販売するコンサルタント業務を担当し、試験や面接を経てドイツ・ミュンヘンの本社へ行くことになり、開発者として7年くらい働きました。やがてアメリカのフォークリフト製造会社のドイツ本社へ転職。社内システム部門に配属され、WEBアプリケーションのBtoB版の開発に携わりました。

当社に復帰後は総務部長からのスタート。電気工事士と電気工事施工管理技士2級の資格は持っていたので、現場のことは分かっていたのですが、やはりドイツと日本の働き方の違いには愕然としました。帰国から10年経った今も変わっていないと感じます。

ドイツでのカルチャーショック
震災を機に帰国、父の後継に

渡独して働き方の違いなど、カルチャーショックがたくさんありました。残業なしが当たり前、四半期に1回はリストラがあり、どんどんスキルアップしないと追いつけない。それでも好きな仕事だったので、私は寝ても覚めてもソフトを作っていました。

日本に戻ったのは2012年。きっかけは東日本大震災でした。ドイツで13年働いても、自分が作った物はメイド・イン・ジャーマニー。日本と関係ない仕事ばかりやっていたので、震災で自分を見つめ直すことになりました。子どもの国籍の問題もあり、80歳を過ぎた父からも、社内に後継者がいないから社長になってくれないかと手紙が届いたんです。

当社に復帰後は総務部長からのスタート。電気工事士と電気工事施工管理技士2級の資格は持っていたので、現場のことは分かっていたのですが、やはりドイツと日本の働き方の違いには愕然としました。帰国から10年経った今も変わっていないと感じます。

モデン工業株式会社
代表取締役

関 泰之氏

電気設備業として外線、内線工事の施工からスタート
社内改革やDXで、建設業を魅力ある産業へ

～筋肉質で無駄のない、不自由ない環境づくりで持続性ある業務遂行へ～

1960年に茂原市で創業。高度経済成長とともに電気設備の外線工事、内線工事を受注し千葉市へと進出したモデン工業株式会社。ドイツでビジネス経験を積み、帰国後に家業の後継者として社内改革に着手、働きやすさの創出に尽力する関泰之社長にお話を伺いました。

関 泰之氏 Profile

せき・やすゆき / 1967年12月、勝浦市生まれ、千葉市育ち。大学の商学部を卒業後、モデン工業株式会社に入社。4年後、コンピューター会社へ転職し、ドイツへ。13年後に帰国。2012年にモデン工業に復帰し、2017年から現職。



▲創業者と経営理念

▲明るくモダンなインテリアが際立つオフィス



▲オフィスにて、社員の皆さんと

経営者として社内制度を整備
若い社員のQOLに成果

社長就任は2017年。以降、働き

方改革と意識改革が必要だと痛感しました。社内制度を整備し、働きやすさを生み出していかなければと、まず社屋の耐震工事、そして事業継続計画を軸にソフトウェアを活用。持続性のある業務を遂行できる筋肉質で無駄のない、不自由のない環境づくりに注力しました。続いてインフラやネットワークを充実させ、社員の給与も上げました。

業績は横ばいですが、社員が結婚したり、子どもが生まれたりといったライフステージの変化を聞くことが増え

Q & A

Q 休日はどのように過ごしますか？

A 冬は八ヶ岳、夏は黒部など登山に夫婦で。また、最近アマチュア無線の免許を取得して、コンテストにも参加しています。

Q 愛読書は？

A 伊藤正一著「黒部の山賊」。三俣山荘などの山小屋を創業した伊藤正一さんの体験記。今、読み返してみても面白いですね。

Q 好きな音楽のジャンルは？

A ジャズ・フュージョン。日本の3人組インストゥルメンタルバンド「fox capture plan」が好きですね。

Q 座右の銘、好きな言葉は？

A ゲーテの言葉で「本当の自由な心とは『認める』ということである」。難しいですが受け入れるとか、自分で納得して常に行動できる状態が自由な心ではないかと。常にそうありたいですね。

Q やる気の源は？

A やる気のある人が周りにいると、自分もやる気が出ます。特に若い人。若い人のやりたいことは、かなえてあげたいと思いますね。

プライベートが充実してきているのか
なと思います。業績面でも、若い世代
が成果を出してくれると信じています。
当社は比較的、若手社員に恵まれてい
るので、仕事に対する前向きさややり
がいを重視し、やる気を損ねないよう
伸ばしていくのと同時に、経験のある
人から早く知識をもらって、良いサイ
クルが生まれるよう独自の教育プログ
ラムを構築していければと思います。

コロナ禍や人手不足は
DXの活用で企業の構造改革を

コロナ禍では、サプライチェーンの寸断で部品が入ってこないほか、工期の延長など徐々に影響が出てきています。例えば1年の工期を3ヶ月延長す

ると、1ヶ月あたり2割の売上減となってしまう。次の決算に影響するよ
うな事態が、最近では立て続けに発生し
ています。

建設業における人手不足は深刻です
が、それを補うのがDXの活用でしょ
う。建設業が魅力のある産業になれば
いい。また、経営者だけいい思いをす
るような企業の構造を変えていかなけ
れば。管理面で、DXにより無駄を省
くことが鍵になると思います。大手企
業が旗振り役になって、変えていつて
ほしいですし、当社もそれに追随した
いと思っています。



▲社長室のデスクにて